

「小樽市における高齢者の歩行空間と都市施設」  
「都心周辺地区の人口高齢化と居住環境」  
「ヨーロッパ中軸国境地帯の地域動態(4)－Saar-Lor-Lux 国境地帯における人口流動」

島山輝雄（日本大学・院）  
川村真也（北海道大学・院）  
長沼佐枝（東京大学・院）

呉羽正昭（筑波大学）  
（江崎雄治記）

## 「JICA ヨルダン家族計画・WID プロジェクト」運営指導調査団報告

国際協力事業団（JICA）は1997年7月～2000年6月の3年間にわたり、ヨルダン政府の（カラク県南ゴール郡をモデル地域とする）家族計画・WIDプロジェクト（フェーズⅠ）に協力してきた。このプロジェクトは2000年7月～2003年6月の3年間につき、カラク県全域に拡大して延長されることになった。このフェーズⅡは、現在ほぼ中間点にあたるところから、JICAは本プロジェクトの国内委員会委員長を務める筆者を団長とする運営指導調査団を派遣することにした（他のメンバーは岡野香苗（JICA 医療協力部計画課）、野口純子（財国際開発高等教育機構事業部）の2名である）。期間は2002年1月31日（木）～2月10日（日）の11日間であった。

調査団は、日本側専門家チーム、ヨルダン側カウンターパートからプロジェクトの進捗状況をヒアリングし、ヨルダン政府・NGO 関係機関（JOHUD、保健省、計画省、全国人口委員会）、プロジェクト・サイトのカラク県関係機関（保健局、母子保健センター）を訪問し、意見交換をするとともに、プロジェクト対象家庭（2世帯）でのインタビューを行う機会をもった。

本プロジェクトは、カイロ会議の行動計画で示された、家族計画はリプロダクティブ・ヘルスの一部であり、人口・開発問題の解決には女性のエンパワーメントが必要だとする政策指針を体現した総合的プロジェクトであり、その具体的内容は(1)家族計画を含むリプロダクティブ・ヘルスサービスの強化、(2)IEC を活用した参加型啓蒙普及活動を通じた住民の意識向上、(3)女性の収入創出活動への支援の3つの活動からなる。プロジェクトの性格上、複数の機関、複数分野の専門家、カウンターパートが関係するため組織調整上の難しさがつきまとうものの、佐藤都喜子プロジェクト・リーダーを中心として全体として順調に進められており、JICA、ヨルダン政府部内の評価も高い。本調査団はプロジェクト関係者からのヒアリングをふまえて、これまでのプロジェクトの進捗状況の評価、今後1年半の活動計画、JICA 側の協力内容等に関しミニッツを作成し、最終日に調査団とヨルダン関係機関の双方がこれに調印し、両国の今後の更なる協力を確認し合った。（阿藤 誠記）

## 中国における HIV／エイズ問題の現状調査

中国は人口12億6千万人以上を抱える国であり、その HIV／エイズの流行状況は将来の世界流行の趨勢に大きく影響を与えかねない。また、日本に距離的にも近く、経済的にも緊密な関係にあり、人的交流も深く密接であるため、中国での流行は日本の HIV 予防にとっても大きな意味を持ちうる。近年の日本の HIV／エイズ報告数は、日本人の急増が目立つものの、男性の約15%、女性では50%以上が外国籍者である。

2002年2月4日から8日まで中国を訪問し、政府、国際機関や NGO などの担当者から中国の HIV 流行の状況や対策、またプロジェクトの成果などについて聞き取り調査を実施した。エイズ予防財団

国際協力部、国立感染症研究所と結核予防会結核研究所の専門家が調査に参加し、多様な側面にわたる知見を得た。中国では、1989年までは主に外国人や海外から帰国した中国人の間で感染者が散発的に発見されていたが、1989年に入ると雲南省で注射針の共有による感染が一気に広がりだした。その後、性感染が急増し、1995年には推定感染者数が10万人に到達し、流行は一般的になっていった。この年にはすでに27省で HIV 感染が発見されている。HIV 感染者数は2001年末には85万人にのぼると推定されている。これに対して、UNFPA はじめ、国際機関もエイズ対策に力を入れている。予防対策の一つとして100%コンドーム使用プログラムのパイロットプロジェクトが WHO の協力により現在進められ、そのような政策が中国の社会・文化的な文脈でどこまで実施可能かつ効果を上げられるかが調査されている。その結果、買売春でのコンドーム使用が半年間で飛躍的に向上する効果が上がり始めている。

今回の調査で中国の HIV 流行が深刻化しつつあることがはっきりと判明した。そのための対策と体制作りは着々と進められているが、広大な国土と巨大な人口に効果を波及させるためにはまだまだ多くの国際協力が必要なことも確かであり、隣国である日本が協力していく必然性は高い。同時に、日本が彼らの活動から学ぶことも多いと考えられる。

(小松隆一記)